

## I 道徳 研究テーマ

道徳的価値に向き合い、自己の生き方をより深くより豊かに見つめ直す子どもを育む学び

## II 研究の重点

自分事として捉えたことを、仲間と共に比較・検討できる授業づくりの手立て

## III 3年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 葛藤場面で用いる演劇的手法の活用

2年次から継続して、演劇的手法を活用してきた。実践した手法は、登場人物になり切り、周りの子どもからの質問に答える中で、さらに言動の背景や理由に迫るホットシーティング。また、フロアの子どもの葛藤を促す言葉のシャワーを浴びて、自分の道徳的価値観を見つめ直す葛藤のトンネルである。これまでの実践を通して、役に入り込み、演じるという行為が、子どもの本音を引き出す効果を実感してきた。3年次でも、他学年や他題材であればどのような演劇的手法の活用の仕方が有効か探るべく、検討を重ねた。2年生「ぐみの木と小とり」の実践では、嵐を前にぐみの実をりすに届けに行こうとする気持ちと行きたくない気持ちとの間で葛藤する小とりになり切る役割演技を取り入れた。その際、この場面の小とりが置かれた状況により没入できるよう、「嵐のトンネル」を用いることにした。教室の真ん中を飛ぶ小とり役の子どもに向かって、両隣に座る子どもたちが声や身振りで嵐を表現し、小とりの葛藤を促す仕掛けである。この嵐のトンネルの前に、考え込む様子の小とり役の子ども、いざ飛び立った後も体を低くし、まるで強い雨を避けるかのように速く走って行った子どもの姿が見られた。この演劇的手法を通して、葛藤が促され、小とりの心情に深く入り込んでいたと言えるのではないか。教材の中で子どもが最も葛藤する場面はどこなのか、そしてその場面の登場人物によりなり切るために、どのような演劇的手法の活用が考えられるか。今後の授業研究へのヒントを得た実践であったと考える。



#### (2) 複数の立場から道徳的価値を捉える授業づくり

前述した2年生の実践では、「親切」がテーマとなっている教材を扱った。だが、「親切」と言っても、どの立場に立つかによって、多様な捉えができる価値項目である。事前検討会、本実践、授業協議会を通して、こうした認識を新たにすることができた。

「小とりさんはぐみの木さんにありがとうと言いたかったと思う」と発言した子どもは、小とりがぐみの木への感謝の気持ちからりすに親切にしたという考えだ。「お礼に」という言葉も子どもたちから聞かれた。りすにぐみの実を届け終えた小とり役の子どもに、「嵐が止んでからでもよかったんじゃない。風邪ひくよ。」と揺さぶりを掛けた教師に対し、「一秒でも早く楽にしたい」と返す子どもの発言からは、りすの体を思いやる気持ちが親切な行動を促したという考えが伺える。本実践の役割演技には登場しなかったが、ぐみの木の視点では、りすへの友情の気持ちが親切に結び付いていることを示す反応が子どもたちから出てくることも予想される。

このように、子どもたちが心から納得する道徳的価値観を見いだすことができるよう、複数の立場から価値項目について考え、それを共有していく授業づくりが重要であると気付くことができた。

### 2 課題 教師の道徳的価値の捉えを広げ、効果的な切り返しにつなげる

3年次までに、一つの教材でも、子どもは道徳的価値を多様に捉えるということを実感してきた。そして演劇的手法によって引き出された子どもたちの本音の中に、教師の想定にない道徳的価値が見られた時の対応に依然として課題が残った。授業で扱う教材について、教師が道徳的価値の捉えの幅を広げ、深めることが欠かせない。そうすることで、子どもたちの本質に迫る発言や深めたい発言を逃さず、大切に扱うことができると考える。また効果的な切り返しの発問を想定することにもつながる。3年次までの成果を生かした教材研究を継続し、子どもたちが道徳的価値に対する考えを深められる授業づくりを今後目指したい。